

『いま、松下竜一を読む』

2015年06月03日

ノンフィクション作家の下嶋哲朗氏は『いま、松下竜一を読む』を上梓している。評伝を書く人は皆、思い入れを持って書くのだろうが、下嶋氏は松下氏を「ある意味での使徒」と言い、相当な思い入れを込めて著している。松下氏の生涯と著作から「やさしさは強靱な抵抗力となりうるか」ということを、主題にしている。

松下氏との出会いは『豆腐屋の四季』を読んだ時である。人はこんなにやさしくなれるものかと深い感銘を受けた。彼は大分県中津市で生まれた。そこは、私の育った杵築市から電車で30分くらいの町で、『豆腐屋の四季』の風景や言葉使いに親しみを感じた。豆腐屋を止めてからの変身に目を見張った。以後、松下氏の動向に関心を持ち続けてきた。『いま、松下竜一を読む』を読み、改めて松下氏の生き方の凄さに敬服した。そして、下嶋氏が「いま」読むことの必要を訴えていることが理解できる。

松下氏は幼い時に急性肺炎になり高熱が続いた。その病で目にホシが入り右目を失明した。また、ひどい虚弱児であった。いじめられ泣いて帰ることが多かった。母親は「竜ちゃんの心がやさしいから、お星様が流れて来てとまってくださったのだよ」と言い、一度として、強い子になれとは言わず、ただ、やさしかれと語りかけたという。この母親の愛と言葉が彼の心を育てた。「母はたぶん知っていたのです。やさしさに徹することでしょうか、ぼくは強くなれないのだと。でもほんとうにやさしくなることは、なんと至難なことでしょう」と書いている。母親が亡くなり、弟たちを育てるために、進学をあきらめ、父の豆腐屋を継いだ。貧しい生活に弟たちは荒れた。彼も自殺を願うが、家族を思い、留まった。豆腐作りをしながら、苦しみと哀しみから、言葉を紡ぎだし、朝日歌壇に投稿し、超難関の中、幾度となく入選し、選者たちに激賞されている。

極貧の豆腐屋を廃業し、文筆業に専念する。環境保護、公害問題に関する闘いに加わり、全国各地を飛び回る。そして、地元・中津での九州電力による豊前火力発電所建設に「環境権」を盾に抗うが、敗北する。巨大な権力に翻弄される市井の人間の無力感、辛酸を味わう。そして、ノンフィクションを著すようになっていく。それらは全て、巨大な力に押しつぶされている人々の物語である。兵庫県の「甲山学園」の園児殺害冤罪事件を『記憶の闇—六甲事件』で、三菱重工本社ビルを爆破した「東アジア反日武装戦線“狼”部隊」の記録を『狼煙を見よ』で、日本赤軍ハイジャック事件で人質交換に指名された泉水博に関わって『怒りという、逃亡には非ず』など、多数著している。山口県宇部市の牧師夫人、笠井孝子氏は教会の「殻」から踏み出したいと迷っていたが、松下氏との交流の中で、3人を残忍に殺害した死刑囚の青年を養子にする。愛を経験したことの無い死刑囚は頑なに拒絶するが、孝子氏の無償の愛と赦しの中で、受け入れ合っていく。その経緯を著した『汝を子に迎えん』は感動的である。松下氏が編集発行人した「草の根通信」は多くの読者を得ているが、彼と触れ合う人々のやさしさと愛とユーモアに溢れているからであった。

幼い時、母親から教えられた「やさしさ」を心に深く秘めて、それを武器にして人の命を慈しみ、社会の不条理と闘ってきた。他人を傷つけることなく、自らが傷つきピンボーを通した生涯と著作は賛同者を呼び起こし続ける。下嶋氏は「やさしさがそのやさしさのまま強靱な抵抗力になりえぬのか。なる！ いま松下竜一を読む意義は『いま』という現在だからあるのだ」と締めくくっている。憲法無視、辺野古移転、原発再稼働を強行する政府に対し、松下氏に倣い、やさしさで対抗できると言っているのである。